中国農村紡織業地域における社会的分業と就業状況について

—山東省濰坊市昌邑県柳疃鎮および青郷郷の調査分析—

座　間　紘　一

〈目　　次〉

はじめに
Ⅰ．経済概況と紡織業の位置
　1．昌邑県
　2．柳疃鎮
　3．青郷郷張家車道村
Ⅱ．紡織工場の概況
　1．昌邑絹織物第二工場
　2．柳疃鎮の紡織工場
　3．青郷郷張家車道村の染色織物工場
Ⅲ．地域農業の概況
　1．柳疃鎮
　2．青郷郷張家車道村
Ⅳ．青郷郷の一村の農家経済の概況と就業状況
　1．農業生産の概況
　　イ．生産手段の所有，分配状況
　　ロ．農業生産の分化，多様化状況
　2．非農業への就業状況
　3．貨幣経済化の特徴
まとめにかえて

はじめに

本稿は先に発表した『中国農村における家族単位の経営請負制（「大包乾」）下での家族経営について—山東省陵県鄧集郷南張村の調査分析—』（『東亜経済研究』第50巻第1.2号，昭和61年10月）と対をなすものである。

筆者は1984年11月18-19日に潍坊市昌邑県を訪問し，青郷郷張家車道村，柳疃鎮，昌邑絹織物第二工場を訪問し，関係者から説明を受けた。18日夜には，県郷鎮企業局副局長付支坤氏から県の郷鎮企業について説明を受けた。更に，青郷郷の一自然村に対し，簡単な全戸調査を行なうことができた。この調査は自分で行なったのではなく，予め作成しておいた調査表を，県の役人を介し，ある教師に依頼し，彼によって行なわれたものである。筆者は仲介してくれた県の役人に調査表について若干の説明をしたに留まる。調査表はほぼ一ヵ月後，県から潍坊市外事弁公室主任を介して郵送されてきた。

昌邑は潍坊市轄の県であり，同市の北東部に隣接し，県城は潍坊市から北東約30kmの位置にある。柳疃鎮，青郷郷は旧の公社所在地で，前者は県城の北10km，後者はそのまた北約7kmの位置にある。

昌邑県は紡織業が比較的盛んな地域で，とりわけ柳疃鎮，青郷郷は農村紡織業に特化した地域である。

本稿は経済改革進行下での農村紡織業地域における社会的分業のあり方，就業形態について，事例分析を行なうものである。

Ⅰ．経済概況と紡織業の位置

1．昌邑県

人口は63万人で，24郷鎮，808行政村からなる。1983年の農業総収入は4億1800万元，工副業総収入は2億4000万元，農民1人当り所得は502元である。紡織業の生産額は工副業生産額の半分以上を占め，本県の中心的産業である。1984年時点での各種織機械数7200余台，従業員40000余人，1983年の年生産額は1億5100万元である（『大衆日報』1984年10月5日）。多くの郷鎮，

村が織布業を経営し，絹織物，綿布，化繊の広幅，色物を生産している。その中心地の一つが柳疃鎮である。

2．柳疃鎮

人口は2万6000人，うち男女労働力1万2000人で，42行政村，45自然村からなる。ここの産業構造は典型的な「工副業で農業を補う」型になっている。即ち，郷鎮企業従業員の労働力総数に占める割合は75.8％（『大衆日報』1985年10月12日）であり，第1表に見るように，1983年の農，林，牧，工副，漁業の純収入に占める工副業の割合は81.6％である。

第1表　柳疃鎮の純収入の状況(1983)

部　門	純収入	割　合
農　業	832 万元	17.0 %
林　業	18	0.36
牧　畜	36	0.73
工副業	4,000	81.3
漁　業	34	0.69
計	4,920	100.0

工副業の構成は，第2表（次ページ）のようである。

繊維関係の被服，紡織，染色業の職員労働者数および生産総額の全工副業のそれに対する割合は72.3％，75.8％と圧倒的に高い。工副業，とりわけ紡織業の上納利潤の鎮内での再配分を通じた農業補塡，教育福祉への投資がなされている。それ以外では，従業員数で見ると，建築隊，建材工場，商業がこれに次いでいる。前二者は農村の建築ブームによって増加したものであり，ほとんど鎮内の需要を満たすものである。商業，運輸業の発展は紡織業の発展および地域の商品経済化と結びついている。全体として，紡織業を除けば，目立ったものはない。

第2表　柳疃鎮工副業の概要(1984.10)

	合計			うち鎮級			村＝大隊級			生産隊数		
	戸数	職工数	生産額販売額手数料	戸数	職工数	生産額販売額手数料	戸数	職工数	生産額販売額手数料	戸数	職工数	生産額販売額手数料
農機具修理製造工場	22戸	175人	150万元	2戸	150人	130万元	20戸	25人	20万元	戸	人	万元
被服工場	33※	195	74	1	30	20	10	115	24	21	50	30
食品加工場	2	23	31	2	23	31						
建材工場	24	440	758	2	40	50	4	40	420	18	360	288
農副産物加工場	61	260	80	1	60	50				60	200	30
建築隊	11	500	536	1	200	150				10	300	386
運輸隊	119	302	100	1	12	5	8	40	45	110	250	50
飲食サービス業	36	108	20	2	18	6	34	90	14			
商業	165	430	110	9	130	45				156	300	65
紡織業	40	5,320※	5,760	1	240	500	36	5,000	5,000	3	60	260
染色業	4	137	700	1	60	100	2	50	500	1	27	100
ビニール加工業	2	165	300	1	125	200	1	40	100			
合計	519	7,820	8,619	22	1,088	1,287	81	5,350	6,169	416	1,423	1,223

※は数があわない。

3．青郷郷張家車道村

戸数175戸，人口700人，男女労働力260人で，行政村である。総収入に占める工副業の割合は80％で，労働力の約80％が工副業に従事する。工副業の構成は第3表のようである。

第3表　青郷郷張家車道村の工副業の概況(1983年)

	設立年次	従業員数	うち管理・技術者	生産・販売高	利潤	従業員1人当り利潤	備考
紡織染色工場	1979.11	150人	25人	350.0万元	70.0万元	4,670元	84.1～10月の生産額400万元。利潤83万元
果樹園	1978	31	7	7.5	3.7	1,193	リンゴ(4,500株)桃、梨
製粉所	1983	14		5.2	2.3	1,643	機械7台
搾油所	1978	7		4.7	2.8	4,000	機械5台
農業機械センター	1980	17	15	11.7	2.0	1,176	運輸業もおこなう
計		219	47	379.1	80.8		

就業者の68.5％，売上の93％，利潤の87.4％が紡織染色業から得られている。ここでもまた「工副業によって農業を補う」所得再分配式がとられている。他に目立った業種はなく，ここもまた紡織業に特化した村である。

Ⅱ．紡織工場の概況

1．昌邑絹織物第二工場

柳疃鎮はこの地方における伝統的絹織物産地であり，ここの絹織物は400余年の歴史を持ち，製品は22ヶ国と地区に輸出され，最近では外貨獲得政策のために急速に発展させられている（『大衆日報』1986年10月12日）。昌邑絹織物第二工場はこの地域の絹織物業の中心である。工場の発展概要は第4（次ページ）表のようである。

操業は1951年で，1984年11月調査時点で従業員数1052人，うち正式職工300人，残りは臨時工であった。1978年から83年までの5年間に正式職工が209人から280人へと71人増加しているのに対し，臨時工は493人から772人へと279人増加している。

第4表　昌邑第二絹織物工場の概要

	投資額	職員・労働者数		管理者	職員・労働者数		生産高	利潤			外勤労働者
		総数	うち工場内従業員		正式職工※	臨時工		総額	うち分配利潤	税金	
1978年	36.6万元	1,302人	702人	30人	209人	493人	1,856.3万元	125.4万元	11.0万元	54.2万元	600
79	38.4	1,311	711	30	216	495	1,964.4	100.4	6.0	42.4	600
80	20.8	1,256	736	47	228	508	2,021.0	100.5	19.2	53.0	520
81	64.4	1,071	751	49	239	512	2,717.0	125.0	35.8	52.7	320
82	54.0	1,003	763	52	245	518	2,186.0	150.0	43.5	69.7	240
83	115.0	1,132	1,052	67	280	772	2,140.0	155.4	22.2	41.1	80

※加工に参加したものも含む　　83年の外部への加工費　132万元

同外注関係

	対象		機械	加工賃
1978年	6公社	68大隊	1,050台（うち700台は手工業）	144.0万元
79	6	68	1,050（手工業600台、その他鉄機）	147.0
80	6	64	900（〃 400台 〃）	143.4
81	5	58	800（〃 400台 〃）	125.9
82	4	50	650（〃 300台 〃）	127.6
83	4	20	400（〃 200台 〃）	106.4

※機械を貸しつけ加工させるやり方である。減少は下請け企業の独立による。

注目すべきはこの工場の地域的広がりである。1978，79年には周辺6人民公社の68産大隊に1050台の織機を貸付（うち700台は足踏み織機），600人の外勤従業員を抱え，彼らを中心に織布の外部加工が行なわれていた。この5年間に外業部門の分離，自立化が進められた。以下で述べる柳疃鎮，張家車道村の紡織染色工場もこの工場から分離したものである。1984年には昌邑県全体で，郷鎮営，村営，個人経営の事業所が40ヵ所増え，織機は400台近く増加した（『大衆日報』1985年1月7日）。この間この工場の規模は全体としてはそれほど拡大していない。1983年には外部加工請負は4人民公社の20生産大隊が織機400台で行なうようになっている。この工場の外勤従業員もそれに応じて600人から80人に激減している。またこの年，115万元の投資がなされ，工場内従業員は299人増加している。

生産計画は昌邑県紡織局がたて，製品の種類および生産量を下達する。製品は40余品種，59柄あり，60％が輸出および少数民族向けに指令計画に基づいて生産され，潍坊市生糸絹布買い付け所に納入し，40％は工場が自分で販売先を探す。その為に販売と情報収集のための事務所を潍坊，青島，煙台に置き，現在東北に計画中とのことである。販売先は山東，東北，河北，河南，山西，狭西，青海，甘粛，北京，新疆と広い範囲にわたっている。原料調達は60％は県卸売所が公定価格で支給し，40％は工場自身が協議価格で調達する。

管理運営面では，第一に工場の管理機構は，工場長1，副工場長3の下に1事務室，10行政課室，5車間からなる。行政課室は生産，技術，財務，販売，動力設備，行政，保安，社会加工（＝下請け），教育からなり，車間は準備，紡織，製品管理，洗浄，機械補修からなる。第二に労働力雇用では，正式職工は工場が計画を建て，県労働局に申請し，労働局が試験をし，工場に配分する。工場は希望条件を出すが，満たされるとは限らず，工場で訓練する。臨時工は人数だけ労働局に申請し，許可を受け，工場が自分で募集し，試験をして採用する。5年契約で成績の良いものは更新する。第三に賃金では，請負責任制が採られている。第四に外業部との関係では，原料，半製品を持っていき，加工させ，加工賃を支払う。加工賃は製品の等級にしたがっ

て支払われ，基準を超えれば奨励金が支給される。

従業員については，まず，女子が82％を占め，全体の年齢構成では，50歳以上は12人，30から39歳までは170人，18から29歳までが882人で，平均27.7歳である。第二に出身地は，臨時工は本鎮が300人，付近の6郷鎮が400人であり，正式職工は本県が200人，青島からの下放青年が20人，ここに田舎があり，山東省各地，河北，北京から戻ってきた人が20人である。第三に正式職工と臨時工の待遇面の差異は，先に身分的安定の差異のほか，現在は食糧手当の有無以外にはないという。というのは従来は正式職工にたいしては，8級賃金制が採られ，1年ごとに勤務状態を見て昇級を決める方法が採られていたが，現在は出来高に応じて支払われるからだという。

2．柳疃鎮の紡織工場

鎮轄地域では鎮が1工場，全村42中，39村が紡織業を営み，計1000台の織機があり，総収入は1500万元である。鎮営の製糸絹織物工場は1978年に先の昌邑絹織物第二工場から分離，独立したものである。1983年の従業員は250人，利潤は42万元である。鎮営企業の主なものは第5表（次ページ）のようであるが，製糸・絹織物工場は労働者数，管理者数，生産額，利潤とも他の鎮営企業を上回っている。ここの従業員は全員農民戸籍である。農民戸籍の者は集団からの土地の配分に与るが食糧の配給は受けられない。

3．青郷郷張家車道村の染色織物工場

第3表に見たように，この工場は1979年11月に設立された。当初自己資金5万元，銀行貸付7万元で，織機を7台購入し，昌邑絹織物第二工場より指導を受け，技術者7人を養成してもらい操業を開始した。製品は綿布，化繊で販路は山東省内が50％，省外が50％である。販売は県の販売公司を通ずる計画販売が20％で，残りは自主販売である。北京，天津，青島，常州に計6人の販売員を置いている。原材料は100％自己調達である。

経営は工場長請負制で，3年期限で村から経営を任されている。工場長は村長兼任であった。組織構成は，車間は3で生産員125人，技術員12人，管理員13人で，管理員の構成は正副主任が2人，車間主任3人，販売課長1人，

第5表　鎮営工業の概要

	設立年次	労働者数	管理者数	生産額	利潤	正規の労働者数	農民戸籍の亦工亦農	固定資産	流動資産	税金	賃金／人
農器具修理製造工場	1958年	130人	9人	100万元	8.5万元	11人	119人				
粮油工場	1958	50	6	150	3.0	1	49				
製糸絹織物工場	1978	250	11	500	42.0	0	250				
被服工場	1975	25	3	25	2.0	0	25				
ビニール加工場	1981	125	10	200	16.0	0	125				
建築隊	1975	常年工 124 季節工 120			8.0	0	244				
自動車修理工場	1984	29	3		3.0	0	29				
プリント染色工場	1984	60		100	4.0	0	60				
製塩場	1978	10		10	1.0	0	10				
合計9場		923		1,000	85.0	12	911	287万元	350万元	40万元	700～800元
					1人当り 1,026元						

経営課長1人，財務3人，会計1人，保管2人である。賃金決定システムは，生産員は例えば織布の場合，1m当たり1等級は1毛，2等級は0.8毛，3等級は0.5毛で，出来高賃金である。技術員は機械単位で請負，定期検査を月毎，試験を季毎，等級検査を年毎に行ない，1-5級に格付けされる。管理員は計画を建て，年末に検査し，計画の達成率で等級を決め，1-5級に格付けされる。賃金は月平均115元で，最大のものは187元である。ボーナスは年平均160元，最大は260元である。

従業員は地域的には2-8kmの範囲から集められ，本村優先で工場長が決定する。外村の場合初級中学卒をとる。55%が本村出身者，45%が外村出身者である。外村出身者は寄宿生活をする。雇用形態別では常年工が95%，臨時工が5%である。臨時工は農閑期だけで，固定的な仕事はない。従業員は全員農民戸籍で，口糧田を均等に配分され，1ムー当たり年間17日農作業に出ることを義務付けられる。

ここでⅠ．Ⅱ．で述べたことをまとめると，第一に，この地域は伝統的な織布業地域で，県営工場を中心に，その外業部門が広く分布していた。近年全国的な消費拡大，輸出増強政策推進のなかで，外業部の分離，独立化，農村織布業の振興，本工場自身の近代化，拡張政策が採られ，紡織業は就業，所得面でこの地域の基幹的産業になっている。第二に，製品は山東省内だけでなく，輸出，省外販売と広い販路を持ち，村営工場に至るまで販売員を省外に派遣し，その意味では地域的商品ではない。生産販売では，行政指令的な計画生産，計画納入，公定価格と自主生産，自己販売，協議価格の二元的体制が村営工場に至るまでとられている。第三は，県営工場と言えども8割近い従業員が農民戸籍の臨時工であり，鎮営，村営では全従業員が農民戸籍である。彼らは基本的には土地に結び付けられた存在である。しかし従業員の出身地の地域的広がりは鎮営，村営でも行政上の境界を超えている。第四に，経営管理面では生産責任制による請負ないし出来高賃金制が採られ，従業員は不十分な労働管理，労働条件のもとで，ハードな労働に従事していることである。これによって国営企業の労働者に匹敵する現金収入が得られて

いるが，身分保障，社会保障は極めて弱い。

以上が労働力を土地や地域から引き出す側の状況である。

Ⅲ．地域農業の概況

1．柳疃鎮

平地で黒土層からなり，耕地は38000ムーである。農業人口は26400人で農業人口1人当たり1.44ムー（＝9.6アール）である。他に水産養殖面積が300ムーある。

設備機械の装備状況では，水利面はダム1，幹線水路4による有効灌漑面積20000ムー，電動ポンプによる有効灌漑面積16000ムーで，計36000ムーと，全体の95％が灌漑できる。農業機械は，トラクター346台（2150馬力），ジーゼルエンジン670台（9774馬力），モーター735台（9827馬力），役畜1500頭，ポンプ，脱穀機，リヤカー15000台で，機械化状況は機械耕作面積36000ムー，同播種面積29000ムー，同収穫面積27000ムーと機械化は極めて進んでいる。

経営項目は，耕種では食糧（小麦，とうもろこし，大豆）栽培面積29000ムー，棉花8000ムー，野菜1000ムーと比較的野菜が多い。食糧，棉花は各村で均等に生産しているが，蔬菜は県城に近い南部の1村で専業的に生産している。

1978年から1983年までの農業生産発展状況は第6表のようである。

1983年までに小麦，とうもろこしの生産量は倍増し，棉花は10倍以上，野

第6表　柳疃鎮農作物収量（万斤）

	小麦	とうもろこし	大豆	綿花	蔬菜
1978	854	586	101	9.9	114
79	665	436	119	15.5	107
80	521	535	110	18.5	247
81	1,120	864	137	47.0	417
82	914	1,110	95	83.0	480
83	1,610	1,200	102	110.0	500

菜は4.4倍に増加し，大豆だけが減少している。造林面積は1.8倍に，大家畜は2倍以上，鶏は3.3倍に増加している。養鶏10万羽のうち，100羽以上の専業戸は400戸でその収入は平均年1400元である。養豚8000頭については，多頭飼育は無く，7300戸の農家が各戸1頭から多くて数頭を飼育している。兎は近年急速に普及し始めたものである。

全体として農業生産もこの間極めて急速に発展している。これには言うまでもなく各戸請負制（大包乾）の導入と紡織業からの様々な所得移転による農業補助が寄与している。

2．青郷郷張家車道村

耕地面積は1100ムーで，うち食糧（小麦，とうもろこし，大豆）栽培面積700ムー，棉花200ムー，果実および林木200ムーである。労働力260人中，専業的に農業に従事する人は40人，15％にすぎない。機械化状況は農業機械センターにトラクター7台，自動車5台，脱穀機，ポンプ，コンバインが計27台，ジーゼルエンジン，モーターが7台，350馬力保有されており，各農家は機械も役畜も保有しない。基本的には機械化されている。1983年の食糧生産量は，総生産量87万斤，1ムー当たり1100斤で，1978年の43万斤，540斤に比べて各々2倍前後増加している。

各戸請負制についてみると，現行制度は1983年から実施された。それによると，耕地については口糧田（＝自家消費用食糧耕地）は人口1人当たり1ムーの割で分配され，その他は責任田として労働力および専業に従って分配される。食糧は国家に責任田1ムー当たり500斤納め，個々の農家は管理と施肥を請負，統一的におこなわれる耕起，播種，水管理，収穫の機械作業には農業機械センターに1ムー当たり17元を支払う。従って基幹的作業は農業機械センターが行なうと見てよい。果樹園，製粉所，農業機械センターは集団請負で上納利潤が決められている。

本村の収支状況は第7表のようである。

工副業からの純収入120万元中，46万元が分配に回され，74万元が生産的投資，福利に回されている。農業純収入は33万元で15万元が農家の所得と

第7表　青郷郷張家車道村の収支状況

	万元	万元	
純収入	159		(100%)
うち工副業		120.0	(80%)
農業		33.0	(20%)
支出			(100%)
うち社員収入	62		(30%)
農家食糧・綿花純収入		9.0	
農家家庭副業		5.7	
その他・集団分配		46.0	
生産的投資			(50%)
福利			(20%)

なっている。生産的投資，福利が純生産の70%にも及んでいる。住民1人当たり収入は1978年の年78元から1983年の820元へと急上昇している。農家所得の分布では，1983年で，3万元以上が3戸，5000以上8000未満が40%，3000以上5000未満が40%，3000元以下が30%と所得水準は極めて高い。

以上のように，この間生産面では食糧が増産し，綿花，蔬菜，畜産などの商業的農業が急テンポで普及し始めた。耕種部門では高い機械装備を基礎に基幹作業を農業機械センターが請負，経常的な肥培管理を各農家が行なう請負制が採られ，他の集団所有の工副業は専業的に集団請負に出されている。耕地は各農家に分配され，経常的には非農業に従事している者に対しても義務的出役が課せられている。所得格差はかなり大きくなっているが，それがなにに基づくものかは次に検討する。ここではかなりの社会的分業が展開しているが，口糧田分配，それに伴う義務的出役という共同体的紐帯を依然として共有している。

Ⅳ．青郷郷の一村の農家経済の概況と就業状況

以下の分析は青郷郷の一村についての悉皆アンケートに基づいて行なう。このアンケートが人を介して行なわれ，再三の要請にもかかわらず，村名，村全体の経済概況については明らかにされなかった。それ故，筆者はこの村

の名前を知らない。

第8表，第9表（次ページ）に見るように，戸数は57戸で，人口構成は総数256，男126，女130である。年齢構成は6才から40才までの層が多く，なかでも5才から20才までは最も多く，過剰労働力問題はこのままでは激化する。5才以下は産児制限のため少ない。職業構成を見ると，非農民戸籍が9であるが，彼らは現在賃金面では，農民に比べて良いとはいえない。しかし食糧の配給，医療費，教育費の手当，転勤の権利などのために，農民の羨望の的になっている。一般に農村住在の場合両親とも非農民の場合は，子供は非農民人口になり，夫が非農民で，妻が農民の場合は子供は農民になる。農民戸籍の常勤的勤務者は15おり，うち教師2は民弁教師である。就業地域は幹部2が青島，その他は県城，鎮，郷，村内である。

第8表　人口の男女別・年齢構成

才	男	女	小　計
－5以下	7 } 22 } 39	4 } 16 } 30	11 } 38 } 69
6－10	15	12	27
11－15	17 } 27	14 } 30	31 } 57
16－17	6	4	10
18－20	4	12	16
21－30	19	22	41
31－40	25	25	50
41－50	16	10	26
51－55	6 } 9	7 } 13	13 } 19
56－60	3	6	9
61以上	8	14	22
小　計	126	130	256

1．農業生産の概況

イ．生産手段の所有，分配状況

土地は責任田（ふつうの用語法では口粮田），請負田（ふつうの用語法では責任田）の二種類に分けられ，配分基準は責任田は人口割，請負田は，労

第9表　労働力構成(人)

人口	259
農業人口	248
非農業人口	9
労働力(整半)	159
非農業労働力	7
農業人口労働力	15
集団副業人口	65
個人副業人口	6
個人商業	7
農業のみ従事者	59

第10表　農業人口1人当り口粮田と家族内農業人口との相関(戸数)

		2 人	3 人	4 人	5 人	6 人	7 人	8 人	9 人	10 人
ムー/人	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸
0.9	1				1					
1.0	2		1		1					
1.1	2				1	1				
1.2	2		1			1				
1.3	27	1	3	10	5	6			1	1
1.4	8		2	5		1				
1.5	7	2		3	2					
1.6	3		1	2						
1.7	1		1							
1.8	1			1						
1.9	2	1		1						
2.0	1	1								
計	57									

(注) 1.家族員数中、非農民戸籍と思われるものは除いた。
2.横は家族内農業人口、縦は農業人口1人当りの口粮田面積(ムー)。

働力，就業状況，その他を，勘案して決めたと思われる。配分面積を見ると，第10表のように責任田は1人当り平均1.32ムー（非農民戸籍者を加えると1.28ムー）であり，分散度は少ない。57戸が家族員1人当り0.9ムーから2.0

ムーの範囲にはいり，家族員数の少ない世帯ほど人当り面積がどちらかといえば大きい。

請負田の配分状況は第11表のようである。

請負田は分散度が極めて大きい。面積は労働力数，とりわけ農業労働力と相関している。総戸数の35％を占める20戸が請け負っておらず，1ムーを請け負う戸数までを含めると56％になる。このことは口糧田を共通の基盤にしてはいるが耕作農家とそれ以外の農家との分業がはっきりしつつあることを示す。

土地以外の生産手段の所有状況を見ると，個人所有の大型農機具はなく，役牛が2頭，中小農具として手押し車，一輪車あるにすぎない。おそらく張家車道村と同じく，大型農機具は集団が所有していると思われる。

ロ．農業生産の分化，多様化状況

まず耕種部門から見ると，作付面積については，小麦283.8ムー，とうもろこし221.1，綿花92.8，大豆65.8ムー，蔬菜16.5ムー，小雑糧7ムーで柳疃鎮とほぼ同様な構成になっている。作付戸数については，小麦57戸，とうもろこし57戸，棉花42戸，大豆42戸，野菜6戸，小雑糧2戸である。口糧田，請負田別に作付耕地を見ると，小麦，とうもろこし，大豆は口糧田に，綿花，野菜，小雑糧は請負田に栽培されているが，後者が，責任田に36.3ムーほどくいこんでいる。作付け面積の戸毎の格差について見ると，小麦，とうもろこしは家族員1人平均で大きな格差はない。綿花は0から7ムーまで，大豆は0から2.5ムーまで，蔬菜は，6戸の農家が請け負っている。規模に大きな差異がある。作付け規模による生産性格差＝規模による優位性は見出せない。小麦，とうもろこしという食糧部門をのぞけば，綿花，大豆で，15戸が，蔬菜，小雑糧では，大多数の農家が，これを栽培していない。これらの部門を請け負う世帯は限られている。

次に養鶏部門を見よう。飼養羽数は鶏1313，鴨28である。全戸が鶏を飼い，規模は16羽から45羽までで平均23羽で，専業化してはいない。家計補助的部門であるといえる。

第11表　請負田面積規模と家族労働力との関係

請負田面積	農家番号	家族員数	労働力数	うち農業労働力	集団副業	非農業自営	非農業勤務	非農業人口
8.0ムー	⑬	9人	6(1.5)人	3(1.2)人	3(0.3)人	人	人	人
7.0	⑩	4	2(1.1)	2(1.1)				
4.0	㉜	6	4(3.1)	1(0.1)	2(2.0)	1(1.0)		
3.0	㊾	4	3(3.0)	2(2.0)	1(1.0)			
	㊳	4	3(2.1)	1(0.1)	2(2.0)			
	㊸	4	2(1.1)	1(1.0)	1(0.1)			
	㉜	3	2(1.1)	2(1.1)				
	㊸	5	3(1.2)	3(1.2)				
	㊽	6	3(2.1)	3(2.1)				
	㊼	5	2(1.1)	2(1.1)				
2.5	㊱	5	4(1.3)	1(0.1)	3(1.2)			
	㊻	5	3(2.1)	2(1.1)	1(1.0)			
2.0	㉘	4	2(1.1)	1(0.1)		1(1.0)		
	㉛	4	4(3.1)	2(2.0)	2(1.1)			
	㉝	5	3(2.1)	1(0.1)	1(1.0)	1(1.0)		
	㉞	7	3(2.1)	1(0.1)		1(1.0)		1(1.0)
	㊺	2	1(1.0)	1(1.0)				
1.5	⑤	5	2(1.1)	1(0.1)			1(1.0)	
	⑦	5	3(1.2)	1(0.1)	1(0.1)			1(1.0)
	⑪	10	6(3.3)	2(1.1)	3(1.2)		1(1.0)	
	⑰	4	2(1.1)	1(0.1)	1(1.0)			
	㉓	3	2(1.1)	1(0.1)	1(1.0)			
	㊳	6	3(1.2)	2(1.1)	1(0.1)			
	㊵	4	4(3.1)	2(1.1)	2(2.0)			
	㊸	4	4(1.3)	2(1.1)	2(0.2)			
1.0	①	4	3(1.2)	1(0.1)	2(1.1)			
	②	3	2(1.1)	1(0.1)	1(1.0)			
	③	4	2(1.1)	1(0.1)	1(1.0)			
	④	5	3(2.1)	1(0.1)	1(1.0)		1(1.0)	
	⑨	4	2(1.1)	1(0.1)	1(1.0)			
	⑭	6	6(1.5)	1(0.1)	5(1.4)			
	⑮	4	2(1.1)	1(0.1)	1(1.0)			
	㉕	4	2(1.1)	1(0.1)			1(1.0)	
	㉖	5	4(1.3)	1(0.1)	2(0.1)		1(1.0)	
	㊶	3	2(1.1)	1(0.1)	1(0.1)			
	㊼	5	2(1.1)	1(0.1)	1(0.1)			

(　)内の左側の数字は男性労働力数、右側は女性労働力数を示す。

(つづき)

請負田面積	農家番号	家族員数	労働力数	うち農業労働力	集団副業	非農業自営	非農業勤務	非農業人口
1.0ムー	㊹	3人	3(2.1)人	2(1.1)人	1(1.0)人	人	人	人
0.0	⑥	5	4(2.2)	1(0.1)	1(0.1)			2(2.0)
	⑧	4	2(1.1)	1(0.1)			1(1.0)	
	⑫	6	2(1.1)	1(0.1)	1(1.0)			
	⑱	6	3(1.2)	1(0.1)	1(0.1)		1(1.0)	
	⑳	2	1(1.0)		1(1.0)			
	㉑	5	4(1.3)	1(0.1)	3(1.2)			
	㉒	4	2(1.1)	1(0.1)	1(1.1)			
	㉔	4	2(1.1)		2(1.1)			
	㉗	3	2(1.1)				2(1.1)	
	㉚	6	5(2.3)	1(0.1)	3(1.2)	1(1.0)		
	㉟	4	3(1.2)		2(0.2)	1(0.1)		
	㊲	4	4(1.3)	1(0.1)	2(1.1)	1(0.1)		
	㊷	4	2(0.2)		1(0.1)		1(0.1)	
	㊹	6	2(1.1)	1(0.1)	1(0.1)			
	㊻	4	2(1.1)				2(1.1)	
	㊾	5	2(1.1)		1(0.1)			1(1.0)
	㊿	3	2(1.1)	1(0.1)				1(1.0)
	(51)	3	1(0.1)	1(0.1)				
	(52)	3	2(1.1)				1(0.1)	1(1.0)
	(55)	3	2(1.1)		1(1.0)		1(0.1)	
平均 8.0ムー	1戸	9人	6.0(1.0,5.0)人	3.0(1.0,2.0)人	3.0(0.0,3.0)人	人	人	人
7.0	1	4	2.0(1.0,1.0)	2.0(1.0,1.0)				
4.0	1	6	4.0(3.0,1.0)	1.0(0.0,1.0)	2.0(2.0,0.0)	1.0(1.0,0.0)		
3.0	7	4.4	2.6(1.6,1.0)	2.0(1.1,0.9)	0.6(0.4,0.2)			
2.5	2	5.0	3.5(1.5,2.0)	1.5(0.5,1.0)	2.0(1.0,1.0)			
2.0	5	4.4	2.6(1.8,0.8)	1.2(0.6,0.6)	0.6(0.4,0.2)	0.6(0.6,0.0)		0.2(0.2,0.0)
1.5	8	5.1	3.3(1.5,1.8)	1.5(0.5,1.0)	1.4(0.6,0.8)		0.3(0.3,0.0)	0.1(0.1,0.0)
1.0	12	4.2	2.8(1.2,1.6)	1.1(0.1,1.0)	1.4(0.8,0.6)		0.3(0.3,0.0)	
0.0	20	4.2	2.5(1.0,1.5)	0.6(0.1,0.5)	1.1(0.4,0.7)	0.2(0.1,0.1)	0.5(0.2,0.3)	0.2(0.2,0.0)

(　)内の左側の数字は男性労働力数、右側は女性労働力数を示す。

畜産部門では，牛1頭，豚70頭である。牛は耕作にほとんど使われていない。豚は1戸当り1—2頭，50戸が飼育している。堆肥作りを兼ねた家計補助的部門である。

林業部門については，43戸が梧を合計311本，1戸平均7.2本植えているに

すぎない。

農業部門内での世帯間の差異については，綿花，とうもろこし，蔬菜では一定の分化，専業化の方向が見られるものの，全体としては同質的であり，商品生産の端緒的段階といえよう。差異は基幹労働力が農業に従事するか否かによって生じ，従事する場合には請負田が分配され，そこに，綿花や蔬菜を栽培することによって，農家の類型は食糧プラス綿花或いは蔬菜型となり，従事しない場合には食糧プラス非農業従事型になる。

2．非農業への就業状況

本村の非農業従事者は第12表のようである。

まず非農民戸籍の就業者は7人（うち男6，女1）おり，平均年齢34.4である。ほかに退職職工が2人いる。勤務地は青島1，県城4，鎮3で，平均賃金は1175元である。家族は村で農耕や，副業に従事しており，農民戸籍で

第12表　職種別就業者数

農家番号	就業場所・業種	人数
1.	集団副業　紡織染色工場	63 人
2.	柳疃第一工場	2
3.	柳疃第二工場	1
3.	供銷社	5
4.	柳疃病院医者	1
5.	昌邑水産公司	2
6.	昌邑水産公司小売部	2
7.	昌邑被服工場	2
8.	昌邑紡織機械工場	1
9.	造船工場	1
10.	皮革製品工場	1
11.	張店製粉工場	1
12.	青島遠洋公司	1
13.	教師	2
14.	個人商業	7
15.	個人副業(縄ない、縫製各1)	5

第13表　非農民人口(9人)

農家番号	性　別	年　齢	職　　種	報酬(年収、元)
6	男	54	退職職工	
〃	男	26	昌邑水産公司	2,000
〃	女	24	〃	
7	男	42	柳疃絹織物工場	1,300
46	男	75	退職職工	
〃	男	30	供銷社	800
49	男	41	張店製粉工場	1,350
50	男	46	幹部(遠洋公司)	
52	男	32	昌邑紡織機械工場	1,000

平均賃金　1,175元　(記入のある6名について)
平均年齢　勤務者のみ　34.4才

もあり，土地から離れられない。潍坊市は，比較的近いにもかかわらず，また，工業的に発展しているにもかかわらず，そこへの勤務者はいない。機械的に計算した労働力は159人だが，その内非農民戸籍は4.4%ということになる。

第14表，第15表に見るように，農民戸籍の常勤的非農業従事者は15人（男9，女6）で，平均年齢は32.9才である。勤務地は県城3，鎮5，青郷3，不明4である。平均賃金は1043.3元である。職種は絹織物工場3，供銷社4，教師2，医師1，無線電信工場1，造船1，被服1，商業1である。雇用形態は教師，医師を除けば臨時工，契約工，副業工になる。

自営業は7人（男7）で，全員が商業に従事している。年間所得は平均1000元である（第16表)。

集団工副業としての紡織染色工場で働くものは63人（男32，女31）である。これは本村においては，農業と並ぶ主要な就業先，所得源である。紡織染色業という職種の性格から見ると男子労働力の割合が大きいのが目立つ。年齢構成は男34.1才，女22.1才で，12才の差がある。平均賃金は1110.0元（男1134.1，女1038.9）で，男女間に約100元の差がある（第17表)。

世帯毎の就業者数を見ると第17表のようである。

第14表　農民戸籍の常勤的非農業従業者

農家番号	性　別	年　齢	職　　種	報酬(年収、元)
4	男	20	柳疃絹織物第一工場	1,100
5	男	36	柳疃病院医者	800
18	男	40	青郷供銷社会計	1,200
25	男	33	青郷供銷社	1,600
26	男	40	柳疃絹織物第一工場	1,500
27	男	32	造船工場 (夫婦)	2,300
〃	女	31	教師	
36	男	43	柳疃供銷社	1,300
42	女	25	皮製品工場	800
46	女	29	青郷供銷社	800
52	女	32	小学校教師	800
55	女	33	柳疃絹織物第二工場	750
8	男	36	昌邑県水産公司小売部	1,200
11	男	30	昌邑県被服工場 (夫婦)	1,500
〃	女	34	無線電信工場	

平均年齢　32.9才
平均賃金　1,043.3元

第15表　常勤的勤務者の勤務地

勤務地	非農民人口	農民戸籍	計
灘坊市外	1		1
灘坊市			
県　域	3	3	6
柳疃鎮	2	5	7
青　郷		3	3
本　村			
不　明	1	4	5
計	7	15	22

約72％の世帯が就業者をだしている。

個人副業従事者は６人（男１，女５）である。職種は縄ない，家庭副業で，収入は２人の平均が600元で，４人は不明である（第19表）。

第16表　個人商業戸

農家番号	性　別	年　齢	種　　類	年鑑所得(元)
28	男	37	販運	1,000
30	男	20	個体商業	1,000
32	男	42	販運	1,200
33	男	51	経鎖	1,600
34	男	33	個人	600
35	男	42	販運	900
48	男	27	〃	700

所得平均　1,000元

第17表　紡織染色工場従業員男女別年齢構成および平均賃金

	男　　子		女　　子	
年　　齢	男(構成)	平均賃金(サンプル数)	女(構成)	平均賃金(サンプル数)
	人　(%)	元　(人)	人　(%)	元　(人)
～14			1 (3.2)	
15～19 (以上 以下)	4 (12.5)		13 (41.9)	942.8 (7)
20～29	8 (25.0)	1,266.7 (3)	12 (38.7)	1,600.0 (1)
30～39	9 (28.0)	1,347.1 (7)	5 (16.1)	1,116.7 (3)
40～49	4 (12.5)	1,450.0 (4)		
50～	7 (21.8)	625.0 (2)		
合　計	32 (100.0)	1,134.1 (22)	31 (100.0)	1,038.9 (18)

平均年齢　男　34.1才、女　22.1才
男女平均賃金　1,110.0元(61人)

第18表　紡績染色工場への世帯当り就業者数別世帯数

就業者数	世 帯 数
人	戸
0	16
1	25
2	12
3	3
4	0
5	1

第19表　個人副業

農業番号	性　別	年　齢	世帯主との続柄	副業種類	年収(元)
8	女	35	妻	縄ない	500
18	女	40	妻	家庭副業	?
25	女	30	妻	?	700
37	男	43	本人	?	?
22	女	38	妻	家庭副業	?
43	女	20	妹	?	?

(注)　?は無記入を示す。

以上の非農業就業者の性格について検討しよう。

まず常勤的勤務者の就業場所の地域的広がりを見ると，判明する範囲では濰坊市外1人，濰坊市0人，県城6人，柳疃鎮7人，青郷3人，不明5人である。不明の5人は比較的近いところに勤務していると思われる。ここでは他出について明確な問いをしていないので大変大雑把な事しか分からないが，少数が鎮，県城に出ており，県外に出ているのは希であるといえよう。県，鎮レベルでは一定の労働市場が開けていると言える。本村の場合は不明であるが，張家車道村は労働力不足で紡織染色工場の労働力の45%を外村から雇用していた。しかし常勤的勤務者が如何なる方法で村外の職にありつけたかは不明である。

就業種類別の収入の差異については，非農業戸籍の恒常的勤務者が最も高く，次いで村内集団工副業従事者，農業戸籍の恒常的勤務者，自営兼業，個人副業の順になっている。しかし，差異は極めて小さい。紡織染色業の好況にもよるが，労働，生活の諸条件を度外視すれば，現状では現金収入の面からは村を離れる利点は少ない。所有主体が同一の場合，異なる工場間での賃金調整は可能であり，工場長請負形態をとっているところでも上納利潤を調整することによって賃金の調整が図られる。所有主体が異なる工場間ではどうか。労働力移動が無いところでは行政的手段による外はないように思われる。

村内非農業就業者の職種について見ると，圧倒的多数が紡織染色業，ついで商業，工場勤務，教師，医師であるが，紡織染色業が突出しており，それ以外の非農業従事者は少ない。

3．貨幣経済化の特徴

本村への貨幣経済の浸透状況についてみよう。

まず生産的支出を取り上げると，農業では大中農機具は集団所有であり，個人の投資は見られない。役畜，小農具の個人所有も少ない。機械化水準は高く，かなりの投資額に及ぶと思われるが，投資は集団によって行なわれ，個人の独自の関与はほとんどない。

非農業の個人営業は商業を除けば殆どないので，非農業分野への個人投資も少ない。

村，鎮，県営企業の投資にたいしてそこでの就業者が直接に行うことはない。したがって，生産面での個人投資は少ない。

次に消費面を見よう。住宅建設では不明1をのぞき，56戸が76年から84年

第20表　耐久家庭用品保有状況

テレビ	1台	21戸(内カラー6)	腕時計	6個	1戸
ラジオ	2台	1戸		5	2
	1	52		4	2
	0	4		3	17
扇風機	1	20		2	30
	0	37		1	3
自転車	4	1		0	2
	2	29	ソファー	2台	1
	1	25		1	19
	0	2		0	37
ミシン	1	46	机	1	49
	0	11	2段戸棚	1台	5
タンス	2	1	洗濯機	1台	1
	1	39	冷蔵庫	1台	1
嘉陵車	1	2			

の間に建設している。特に，82年から84年の間は多い。部屋数は平均5.89間で，4間以下はない。これは全国水準を大きく上回っている。現金収入の増大はまず住宅建設に回される。耐久家庭用品の保有状況は第20表のようである。

これらの数字は，全国，山東省と比較すれば，極めて高いものである。

全体として，貨幣経済の浸透は生産面でよりも消費面で，より進んでいる。従って，現金所得の生産的投下をいかに促すかが政策的課題になっている。本村は紡織業に特化しているために，また紡織業の利潤の再分配を通ずる農業投資が集団によって為されているために個人の生産的投資の場が少ない。

まとめにかえて

以上，紡織業を中心に県営，鎮営，村営の各工場の概況，鎮，村の経済概況，各レベルでの就業状況を見てきた。

ここでは幾つかの視点から論点整理を行なってみたい。

まず，再生産構造からみると，郷村レベル，世帯レベルのいずれも紡織染色業の収入で農業生産を維持し，支えている。郷村レベルでは財政支出を通じ農業機械，化学肥料などに対する補助がなされ，世帯レベルでは賃金収入による家計補助がある。しかし，このメカニズムには，農業発展の契機は少ない。郷村の所得の増大は工業に依存している。工業発展は主として労働者数の増加に依存している。何故ならば，郷鎮企業の分野は労働集約的だからである。労働力が農業からどれほど析出されるかは，基本的には農業生産力に規定されるが，当面所得の増大という観点からは，農業生産量は国家の要請，集団や個人の必要を満たす範囲に留め，労働力を収益性の高い分野にできるだけ多く投入したいという思考が働く。価格の不均衡を前提にすればこうした矛盾は解決できない。当面，行政的な価格補助，指示，指導，現物支給など様々手段が取られている。商品化が進み，地域内で食糧を自給する必要がなくなれば，地域間分業が発展し，地域的には農業から足を抜けるところがでてくるだろう。しかしその過程では正に二元的経済構造に対応して，

行政的方法と経済的方法を駆使して調整を図っていくことになろう。

第二に，地域における社会的分業の展開の特徴を見ると，紡織染色業が，突出して発展している。紡織業は濰坊市—昌邑県—柳疃鎮—青郷郷の一帯の伝統的な紡織業を引き継いでいる。従来は在村の紡織業は織機や糸を貸し付けられての前貸的外業部門であったが，今日鎮営，村営の自立した工場に転化しつつある。そして全体として特産地化しつつある。商品市場および原料調達は省外に多く依存し，地域市場の割合は少なく，原料の地域調達はない。地域市場に依拠するのではなく，外部から得られた取得によって地域内の他分野の投資と貨幣所得の増大，現金支出の増大を通ずるいわば上からの商品経済化，地域内分業化がとられている。

現状では紡織業以外には，村内，郷鎮内の工副業の発展は初歩的段階にある。

第三に，労働力需給と移動について。柳疃鎮，青郷郷とも労働力が不足し，鎮外，村外から労働力を雇用している。しかし外部からの労働力はいずれも近隣のものである。本村では紡織業における男性従業員の割合が高い。このことは紡織業が突出し，他にこれと言った就業機会がないからである。県営工場では農民戸籍の臨時工が多く，鎮営，村営ではすべて農民戸籍である。農民戸籍，非農民戸籍，本村人，外村人が同一工場で働く条件が次第に拡大してきている。当面彼らの雇用，就業条件には様々な格差や差別があるが，労働者としての共通の質の獲得にとって重要な過程である。土地との関わりでは，土地への緊縛の度は和らげられたとは言え，依然として土地に結び付けられている。張家車道村では土地の一部農家への集中が企画されていたが，問題は土地生産性の上昇である。他の就業機会の問題を問わないとすれば，紡織業の好況が続くかぎり，全体の所得増大の観点からは，この方法が優れているが，食糧の地域自給と供出の完遂を前提とするかぎり，家族労働集約化による増収に力を注がざるをえず，その為には生産力水準を超えての規模拡大は不適当である。結局，価格不均衡を地域内所得再配分を通じ解消すべく，地域内工業で得られた所得の一部を農業へ流し込むことによって農民の

生産意欲をかきたてる当面の方法が維持されることになる。その意味ではたとえ労働力不足の地域であっても，農業の専業化，規模拡大はスムースには進展しないだろう。逆にこの間の紡織業を中心とする工副業の急拡大はこうした自給的農業の低コストに支えられたもので，土地に結び付いた兼業的非農業就業者の存在は農村工業発展の一つの基礎でもある。現段階ではこのような労働力供給と需要の双方の側の事情が労働力移動の特殊性を規定していると言える。

（付記）

調査日程およびインタビューの相手は以下のとおりである。

1984年11月18日午後昌邑県青郷郷張家車道村村長張鳴悦氏，同日夜中共昌邑県委員会農村工作部韓憲文氏，県郷鎮企業局副局長付支坤氏，19日午前柳疃鎮鎮長張杜欣氏，同日午後昌邑紡織第二工場工場長李華元氏，尚，調査の全日程に濰坊市人民政府外事弁公室課長聶黎明氏，昌邑県外事課彭欽栄氏，および韓，付の両氏が同行された。

山東省濰坊市昌邑県青郷郷農家経済調査総括表

順　位	世帯番号	世帯員数	労働力数	うち農業労働力	工業労働力	集団副業	商業サービス業	その他	総収入
1	11	10	6	2	1	2	1		8,850
2	13	9	6	3		3			8,350
3	32	6	4	1		2	1		6,550
4	14	6	6	1		5			6,400
5	30	6	5	1		3	1		6,150
6	33	4	4	1		2	1		5,950
7	36	5	4	1		2	1		5,550
8	4	5	3	1	1	1			5,450
9	18	6	3	1		1	1		5,350
10	19	4	3	1		2			5,250
11	21	5	4	1		3			5,250
12	26	5	4	1	1	2			5,250
13	1	4	3	1		2			5,220
14	37	4	4	1		3			5,050
15	7	5	3	1	1※	1			4,750
16	38	6	3	2		1			4,650
17	31	4	4	2		2			4,450
18	44	6	2	1		1			4,350
19	24	4	2			2			4,250
20	16	4	3	2		1			4,050
21	48	6	3	2			1		4,050
22	35	4	3			2	1		4,000
23	40	4	4	2		2			3,950
24	53	4	4	2		2			3,810
25	42	4	2		1	1			3,650
26	56	5	3	2		1			3,650
27	9	4	2	1		1			3,620
28	25	4	2	1			1		3,620
29	10	4	2	2					3,600

うち農業収入	同畜産収入	同　集団副業収入	同　個人副業収入	同　個人商業収入	同賃金収入	同臨時収入	備　考
3,700	150	3,500			1,500		
4,700	150	3,500					蕗菜栽培
3,100	150	2,100		1,200			
2,050	150	4,200					
1,800	150	3,200		1,000			
2,200	150	2,000		1,600			
2,300	150	1,800			1,300		柳疃供銷花
2,500	150	1,500			1,300		柳疃紡織工場
2,200	150		1,800		1,200		供銷社会計
3,100	150	2,000					
1,800	250	3,200					
1,800	150	1,800			1,500		
1,600	120		3,500				
1,700	150	3,200					
2,200	150	900			1,300	200	柳疃鎮紡織工場
2,400	250	1,600				400	
2,300	150	2,000					
1,900	150	1,800				500	
1,500	250	2,500					党支部書記
2,700	150	1,200					
2,700	320			700		330	
1,250	150	1,700		900			
1,700	150	2,100					
1,700	160	1,950					
1,400	150	1,300			800		皮革製品工場
2,350	180	600				520	
2,000	120	1,500					
1,200	120		700		1,600		供銷社
3,000	250					350	

山東省濰坊市昌邑県青郷郷農家経済調査総括表（つづき）

順位	世帯番号	世帯員数	労働力数	うち農業労働力	工業労働力	集団副業	商業サービス業	その他	総収入
30	34	7	3	2			1		3,600
31	37	5	2	1		1			3,600
32	6	5	4	1		1		2(漁業)	3,600
33	47	5	2		1※	1			3,480
34	3	4	2	1		1			3,420
35	12	6	2	1		1			3,350
36	28	4	2	1			1		3,350
37	27	3	2		1			1(教師)	3,300
38	5	5	2	1				1(医師)	3,250
39	2	3	2	1		1			3,200
40	8	4	2	1(個副)			1		3,150
41	23	3	2	1		1			3,050
42	57	5	2	2					3,050
43	17	4	2	1		1			3,000
44	22	4	2	1		1			2,950
45	15	4	2	1		1			2,950
46	55	3	2		1	1			2,950
47	29	4	2	1		1			2,850
48	43	5	3	3					2,850
49	54	3	3	2		1			2,700
50	39	3	2	2					2,600
51	41	3	2	1		1			2,600
52	50	3	2	1	1※				2,550
53	52	3	2		1※			1(教師)	2,450
54	20	2	1			1			2,400
55	46	4	2				2 (うち1)※		2,150
56	45	2	1	1					2,000
57	51	3	1	1					1,200
合計		256	159	65	10	65	14	5	226,670
		構成	100.0	40.9	6.3	40.9	8.8	3.6	100.0

うち農業収入	同畜産収入	同　集団副業収入	同　個人副業収入	同　個人商業収入	同賃金収入	同臨時収入	備　考
2,450	250			600		300	退職労働者(1)
1,850	170	1,350				230	
800		800			2,000		昌邑水産公司
1,000	180	950			1,350		張店製粉工場
1,500	220	1,500				200	
1,700	150	1,500					
1,750	300			1,000		300	
1,000					2,300		
2,000	150				800	300	
1,100	150	1,800				150	
1,300	150		500		1,200		昌邑県土産公司小売部
1,700	150	1,200					
2,450	240					360	
1,700	150	1,150					
1,500	150	1,300					
1,600	150	1,200					
1,100		1,100			750		柳疃紡織第二工場
2,100	150	600					
2,500	150					200	
1,550	180	650				320	
2,450	150						
1,400		1,200					
850					1,400	300	青島遠洋公司
850					1,600		教師
900		1,500					
550					1,600		供銷社
1,650	150				200		
750	250					200	
106,900	8,460	75,450		7,000	23,700	5,160	
47.2	3.7	33.3		3.1	10.5	2.3	

(注) 1．労働数は男子16－60才、女子16－55才の人をさす。
2．農業労働力は、調査表の中で農業人口中、工業、副業、商業、サービス業、その他に従事していないものをさす。
3．工業労働力中※印の4人は、非農民人口、その他は農民人口、商業、サービス業、その他の※印も非農民人口である。
4．集団副業従事者は主として集団副業に従事しているもので農民人口である。